〈資料紹介〉

故青木光利氏寄贈資料について

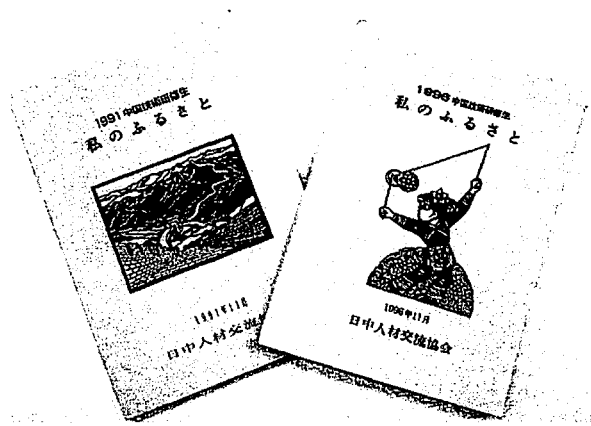
東亜同文書院大学記念センター　ポストドクター　武井義和

すでに折に触れて述べているように、東亜同文書院大学記念センターは東亜同文書院に関わる資料と、孫文の協力者であった山田良政・純三郎兄弟、純三郎の四男・故順造氏に関係する資料を中心に所蔵している。そうした中で、故青木光利氏が2007年に寄贈された、ダンボール7箱分の日中人材交流協会に関する資料は異色の存在である。

故青木氏は1956（昭和31）年愛知大学を卒業後、通産省に入省、退職後の1985年に技術習得の中国研修生を受け入れる組織である日中人材交流協会を立ち上げられた。10数年におよぶその活動において、1年間の研修を各企業において終えた成果を日本語で発表する弁論大会が、1990年から2000年まで毎年愛知大学豊橋校舎で開催されてきた。1位から3位までの入賞者には『中日大辞典』が贈られ、当時辞典編纂処長の今泉潤太郎先生が審査委員長を務められたという形で愛知大学と少なからぬ関係もあった。

寄贈された資料のほとんどは日中人材交流協会が受け入れた、何百人と言う研修生たちの履歴書や写真類で占められている。現在の観点からするとこれらは「個人情報」の扱いとなるであろうが、一方で日中人材交流協会は、研修生たちが出身地や中国での勤務先などについて日本語で書いた文章を『私のふるさと』という冊子にして刊行してきた。これらすべては彼らの日本での活動ぶりをうかがわせるものであると同時に、彼らが帰国後どのような職に就き、日本とどのような形で関わったのかを考える上でも大変興味深いものである。とともに、研修生の視角から日中関係を考えるという点からしても、貴重な資料であるといえよう。また、前記のような形で愛知大学も関わっていた点についていえば、これらの資料は愛知大学と中国との関係を考える手立てとなり得るものではないかとも思われる。今後、これらをどのように管理し、そしてどのように活かしていくべきかが課題となる。

これらの貴重かつ厖大な量の資料を記念センターに寄贈下さいました故青木光利様のご冥福をお祈り致します。



日中人材交流協会が発行した『私のふるさと』。
（右）1991年発行、（左）1996年発行。